同居人の処分

スマホの着信音。胸にさざ波が立つ。耳に当てる。付き合って半年になる彼の低い声が耳から胸の奥までを浸す。私の好きな、錆びた鉄のような男らしい深い声音。深いのは声だけじゃない。何もかも承知で、前々からの私のこんな生活を認めてくれてる度量の深さ。

「うん…うん。ごめんね…。もうすぐきちんとするから。うん、ありがと…」

電話を切ってから思う。自分の部屋で恋人と電話で話すことに後ろめたさを覚える、自分のような女は他にいるものだろうか。

キッチンに立つ翔一の屈託のない声がかかる。透明感のある声。この声も好きだった。

「電話、終わった？」

「うん」

「じゃ、食べようか！　丁度できたからさ」

シェフだった翔一の手料理は私のそれよりずっと美味しい。「現役」だった三年前より「進化」してる気さえする。でも、二人で囲む毎日の楽しい夕食にも、ピリオドを打たなきゃならない。現実の彼との結婚を考えるならーー。

翔一がどうだ！というビッグスマイルで食卓に出したブイヤベースは絶品。

「どう、フランスのさ、あの店のより旨いだろ？」

「うん、最高！翔一がフランスで店を出したら、他はみんな閉店だよね」

食事を楽しみつつ、かつて二人で旅した南フランスの思い出話に花が咲く。彼の頭脳にインプットされた記憶は、私のそれと細部までほぼぴったり重なっている。

翔一と同居して二年近くなる。同居を始めるために、結婚資金にと貯めていた蓄えのほとんどを費やしたが、後悔は微塵もありはしない。毎日こうして、好きだった彼の声を聞けて、顔を見合わせて過ごすことができた。昼間の激務にすり減った心身も、小さなこのマンションに帰り着けば、彼の昔に変らぬ優しい微笑と抱擁に迎えられ、癒されてきた。

「ね、ほら、沖縄で食べたあの中身汁。明日あれ食べたいな。作れる？」

「ああ、あれな。オーケイ、任せとけよ。バッチリだ。楽しみにしててくれ」

そう。翔一は何だって出来る。食事が終われば、彼は私を軽々とお姫様だっこして浴室まで運んでくれる。背中もソフトに流してくれる。私も時々は彼の体を拭う。

「お風呂」と言いかけた時、またスマホが鳴った。あの会社からだ。担当者の声。

「ご購入いただいたカスタムメイドのロボットを廃棄なさりたいとのことでしたね」

「はい…。そうです。はい…。明後日ですか？…はい、結構です。お願いします…」

電話を切った。いつかはつけなければならなかったけじめ。顔も声も、記憶もふるまいも翔一そのものでも、一緒にフランスでブイヤベースを食べたあの翔一じゃない。三年前に事故で逝った翔一じゃない。そんなことは初めから分かり切っている。分かっていて、有り金をはたいて夢の続きを見ていた。はかない、幸せな夢だった。

声を明るませ、思いっきりの笑顔でロボットに言った。「お風呂入ろうよ。一緒に」